

11月9日(土)クラーク会館 プログラムおよび発表要旨

プログラム

	部	時間	会場	発表者	所属	題目
午前	開会式	10:00-10:10				
	研究発表 司会： 1) 佐藤 2) ミツ木	10:20- 10:50	1	吉田美穂 佐野愛子	弘前大学 立命館大学	散在地域に住む第二言語学習者の子どもたちが直面する教育課題
			2	杉江聡子	北海学園大学	生成 AI を用いた中国語学習に対する学習者の認識から教師と AI の役割を再考する
		10:50- 11:20	1	中津川雅宣	札幌国際大学	北海道の地方におけるグローバリゼーションと言語：地域言語エコロジーに焦点を当てて
			2	譚翠玲	北海道大学	ユーザーレビューから見る AI 英会話アプリの可能性と課題
		11:20- 11:50	1	UYAMA, Sayo	Hokkaido University	RST Results of Foreign and Returnee High School Students in Sapporo
			2	島山大輝	北海道大学大学院生	タンデム学習における言語選択が学習に与える影響の考察
	連絡	11:50-12:00				
	昼食休憩	12:00-14:00				
	午後	研究発表 司会： 1) 大友 2) 杉江	14:00- 14:30	1	佐藤淳子	北海道大学
2				三ツ木真実	小樽商科大学	質的分析による英語学習エンゲージメントの変化要因の考察
14:30- 15:00			1	河合靖	北海道大学	Rebecca L. Oxford の「Shaking the Foundations: Transformative Learning in the Field of Teaching English to Speakers of Other Languages」に見る変容学習
			2	片岡恋惟	北海道大学大学院生	大学英語教員の授業観・教育観について
会場準備		15:00-15:10				
パネル・ ディスカ ッション		15:10- 16:50	1	『トランスフォーマティブな体験—観光・言語学習・言語接触』 コーディネーター：河合靖（北海道大学） パネリスト：宮下麻美（北海道大学大学院生）、藤田守（拓殖大学北海道短期大学）、村上萌子（北海道大学大学院生）、譚翠玲（北海道大学）		
連絡		16:50-17:00				

懇親会 (18:00-20:00) 場所：FISHMANS SAPPORO (北1条西2丁目2-3 りんどうビル3F)

発表要旨

11月9日(土)午前

研究発表

10:20-10:50 会場：1

氏名：吉田美穂/佐野愛子 所属：弘前大学/立命館大学

題目：多散在地域に住む第二言語学習者の子どもたちが直面する教育課題

要旨：移民の増加が見込まれる 2020 年代の日本において、学校教育における第二言語教育の充実は重要な課題である。しかし、特に散在地域においては、第二言語教育に関する基本的な理解が進んでおらず、支援人材及び予算の不足などによって、子どもたちが第二言語を学び教科学習に参加できる体制が十分構築されているとはいえない状況にある。本発表では、すでに多

くの移民を受け入れてきているカナダ、ドイツ、ハンガリーでのインタビュー調査データをもとに、日本の状況と比較しながら、散在地域に住む第二言語学習者の子どもたちが直面する教育課題について検討する。

10:20-10:50 会場：2

氏名：杉江聡子 所属：北海学園大学

題目：生成 AI を用いた中国語学習に対する学習者の認識から教師と AI の役割を再考する

要旨：生成 AI の爆発的な進化に伴い、外国語教育の意義が問われている。言語置換のスキル修得に偏重する外国語教育の意義は喪失し、外国語を用いて学習者が何をどうしたいか、そのために AI 等のテクノロジーをいかに活用可能か、目的指向・探究型の授業デザインへと転換する必要がある。本研究は、AI を用いることで、初級レベルの中国語学習者にとって意味のある学習経験を生み出す教室内活動、及び人間の教師による最適なフィードバックの在り方を探究することを目的とする。そのために、初修外国語クラスで AI を用いた文章作成のタスクを行い、学期前後の学生アンケートの分析に基づき、AI 活用の中国語学習に対する認識の変化、学習者が人間の教師に求めること、それを実現する指導方略を整理した。本発表では、学生アンケートの結果に基づく中国語文章作成のタスクの改善、AI と教師によるフィードバックの要点を総括する。

10:50-11:20 会場：1

氏名：中津川雅宣 所属：札幌国際大学

題目：北海道の地方におけるグローバリゼーションと言語：地域言語エコロジーに焦点を当てて

要旨：本研究は、国際的に多様なコミュニティにおける言語の役割を調査するものである。特に、インド人移民が増加している北海道の町を対象に、批判的エスノグラフィーの手法を用いて、地域住民が言語的多様性をどのように捉え、関わっているか、また行政がどのように対応しているかを調査した。さらに、インド人移住者が日本語と英語をどのように捉え、生活に取り入れているかについても議論する。

10:50-11:20 会場：2

氏名：譚翠玲 所属：北海道大学

題目：ユーザーレビューから見る AI 英会話アプリの可能性と課題

要旨：AI 技術の急速な進展により、第二言語習得分野でも多くの関連ツールが開発されている。特に、AI 技術を使用した英会話アプリは、学習者の練習機会を増やすだけでなく、英語を話す不安を軽減する効果が報告されている（川田・北濱，2024）。しかし、これらのツールは未だ発展途上であり、多くの課題が残されている。本研究は、AI 英会話アプリ「Speak」のレビューを分析し、英語学習者の新しい教育ツールへの満足度および問題点を明らかにすることを目的とする。具体的には、Google Play から「Speak」のユーザーレビューを収集し、テキストマイニング技術を用いて感情分析や頻出キーワードの抽出を行う。これにより、AI 英会話アプリの教育的効果や改善点を具体的に把握し、その可能性と課題を明確にすることを目指す。

11:20-11:50 会場：1

Name : UYAMA, Sayo Affiliation : Hokkaido University

Title : RST Results of Foreign and Returnee High School Students in Sapporo

Abstract: This research targeted foreign and returnee high school students to measure their reading abilities by the Reading Skill Test (RST), developed in cutting-edge research on AI technology. A questionnaire survey about their self-assessment of

Japanese abilities using Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) and an interview survey about their attitudes toward studying in Japanese and their opinions regarding education were conducted. Results indicated that many of them made higher estimate of their own reading levels despite of their lower level of reading skills on the RST. They, however, revealed their difficulties to read and understand textbook level sentences.

11:20-11:50 会場：2

氏名：畠山大輝 所属：北海道大学大学院生

題目：タンデム学習における言語選択が学習に与える影響の考察

要旨：タンデム学習とは、母語の異なる 2 人が言語スキルの改善や互いの人柄や文化を学ぶために協働する学習形態のことである。タンデム学習は教師が学習に介入しないことから、学習者オートノミーを発揮しやすい環境とされ、近年注目を集めており、その実践や研究が増えている。タンデム学習における多くの実践では、学習のルールや進め方を定めたガイドラインが存在する。教師が学習に介入しないタンデム学習では、ガイドラインが学習を円滑に進めるために重要な役割を果たすものである。しかし、ガイドラインに定められているルールの中には、研究者間で見解が分かれているものも存在する。特に、それぞれの言語の学習時間に目標言語のみを用いるとする言語使用のルールに関しては、研究者間で見解が分かれている。本研究では、私が実際に行ったタンデム学習の 2 つの実践を踏まえて、タンデム学習において、言語を認めることが学習に与える影響の考察を示す。

11月9日(土)午後

研究発表

14:00-14:30 会場：1

氏名：佐藤淳子 所属：北海道大学

題目：英語接触経験が限られている小学生は英語変種をどう捉えているのかー「ある国の英語」と「ある話者の英語」に着目してー

要旨：World Englishes という理念に代表される、英語の地域変種を受容しようという潮流が現れて久しい。しかし、いまだに日本では「ネイティブ・スピーカー」が Kachru (1985) の同心円モデルの Inner-Circle に属する国や地域、特に米国・英国標準英語話者を指す風潮がある。

発表者は英語変種に対する印象が小学生段階でも形成されているのかに興味を持ち、道内の公立小学校に通う 5、6 年生計 92 名に対し、オンラインアンケート（音声を聞いて判断する Matched guise test 等の手法ではなく、「〇〇（国名）の英語のイメージ」など質問文で問う調査）を行った。その結果、「アメリカの英語」は他のどの地域で話されている英語と比べても突出して肯定的な印象を持たれていることが明らかになった。また、当該校ではアフリカ大陸の C 国出身の R 先生が ALT として配属されていたが、C 国の英語に対する印象と R 先生の英語の印象はほぼ関係のないことが示された。R 先生個人の英語については、先行研究で示されている「アメリカ英語」への印象と同等に好印象である項目が多く、集団的印象としての「C 国の英語」と個別的印象としての「R 先生の英語」は切り離されて形成されていることが示唆された。

14:00-14:30 会場：2

氏名：三ツ木真実 所属：小樽商科大学

題目：質的分析による英語学習エンゲージメントの変化要因の考察

要旨：本研究は、英語学習者のエンゲージメントの変化をもたらす要因を質的に分析し、共通するパターンを明らかにすることを目的とする。インタビューやアンケートを通じて過去の英

語学習経験に関わるデータを収集し、それらを微視的に分析することを通じてエンゲージメントに影響を与える主要な要因を探る。また、これらの要因に共通するパターンを整理し、どういった英語学習経験がエンゲージメントの変化をもたらす先行要因として重要であるのかを考察する。

14:30-15:00 会場：1

氏名：河合靖 所属：北海道大学

題目：Rebecca L. Oxfordの「Shaking the Foundations: Transformative Learning in the Field of Teaching English to Speakers of Other Languages」に見る変容学習

要旨：本発表では、『Transformative Language Learning and Teaching』(Leaver, Davidson & Campbell (eds.), 2021, CUP)の第3章として収められた、Rebecca L. Oxfordによる「Shaking the Foundations: Transformative Learning in the Field of Teaching English to Speakers of Other Languages」を概観し、TESOL分野における変容的学習についての彼女の考察を紹介する。変容的学習は、ジャック・メジロウの認知分析的アプローチを第一波、ジョン・ダークスの感情統合的アプローチを第二波とする。この二つのアプローチは表面上大きく異なるように見えるが、じっさいにはそれほど隔たったものではなく、互いに絡み合っていることを、神経生物学的研究、心理学研究、複雑性理論を持ちながら、Oxfordは説明している。

14:30-15:00 会場：2

氏名：片岡恋惟 所属：北海道大学大学院生

題目：大学英語教員の授業観・教育観について

要旨：大学教員を対象とした授業活動に関わる意識や行動、またそれを下支えする授業観に関する研究は未だ確立されていない(山田・関田, 2022)。本研究では、(短期)大学において英語の授業を担当する教員を対象に、山田・関田(2022)において開発された「授業改善に向かう大学授業観・教育観尺度」を使用し、大学英語教員の授業観・教育観について明らかにする。語学授業(外国語科目)とそれ以外の授業とでは、授業の目的、教授法、学習者の特性・ニーズなどが異なることから、担当教員は語学授業に特有の授業観・教育観を持っている可能性がある。また、信念(ビリーフ)は指導経験などにより影響を受けることが明らかにされている(笹島・ボグ, 2009)。そこで本研究では、英語教員としての経験が授業観・教育観に与える影響についても検討する。本研究を通じて、大学英語教員の授業活動に関する意識について包括的に把握することができるだけでなく、より実践的な教員支援策に関する示唆を得ることが期待できる。

パネル・ディスカッション

15:10-16:50 会場：1

題目：『トランスフォーマティブな体験—観光・言語学習・言語接触』

コーディネーター：河合靖(北海道大学)

パネリスト：宮下麻美(北海道大学大学院生)、藤田守(拓殖大学北海道短期大学)、村上萌子(北海道大学大学院生)、譚翠玲(北海道大学)

趣旨説明(河合靖)

多層言語環境社会では、多様な文化背景を持つ集団が共生するために、各自の価値観や体系的知識から逸脱した現象や行動に遭遇して、違和感を覚えたりコンフリクトを生じたりする。

ピアジェの発達心理学では、人は認知的な枠組み「スキーマ(スキーマ)」を持っており、外界の事象をこの枠組みに取り入れる「同化」と、枠組みに合わない事象に合わせて枠組みの方を

修正する「調節」をしながら、理解を進めるとしている。同化と調節を繰り返すことを「均衡化」と呼び、これによって個の認知的枠組みが拡大し、成長・発達につながると言われている。ヘーゲル弁証法的に言えば、低い次元で矛盾しているように見える二つの概念を、高次の段階に高めて調和し統一する（止揚する）とも言えるだろう。単一文化内で安定した価値観や知識体系を持っていた個人が多様な集団と接触すれば、それまでの認知的枠組みが揺さぶられ、自己変容しなければならない状況が生まれてくる。

近年、「変容的（トランスフォーマティブ）」という用語がいくつかの分野で核となる概念として使われるようになってきている。本パネル・ディスカッションでは、登壇者に、観光研究でのトランスフォーマティブ・ツーリズムにおける「変容」、中国語母語話者の日本語発音習得における「変容」、会話分析研究における言語接触場面での共通理解形成をめぐる「変容」、タンドム学習におけるフィードバックと学習者の自己反省による「変容」について話題提供していただく。さらに、それぞれの研究対象における事例を交えながら、その変容の中身について考えて行きたい。多様な文化集団が共生する持続可能な多層言語環境社会の構築へ向けて、建設的なディスカッションの展開を目指す。

パネル1（宮下麻美）

「トランスフォーマティブ・ツーリズムへの参加動機と内的変容—畏敬の念に着目して—」

近年、欧米を中心にトランスフォーマティブ・ツーリズムが注目を集めている。これは旅行者をコンフォートゾーンから脱却させ、インクルーシブな世界観を醸成し、異文化理解と社会的エンパワーメントを促進することに焦点を当てている。この内なる旅のプロセスの理解を深める上で、旅行者の感情的側面を捉えることが重要である。本研究では、特にツーリズムに関連する「畏敬の念」の感情に着目し、国内外のトランスフォーマティブ・ツーリズムの事例を交えながら、ツーリズムにおける「変容」について考えていきたい。

パネル2（藤田守）

「協同学目標言語の音声的特徴の母語への置き換えを通じた音声指導による自己変容—連続する短いCV音節の習得に関する中国人日本語学習者のモデルを例に—」

教室活動における一般的な外国語の音声指導として、教師の発音に続き、学習者がコーラスで発音することが挙げられる。こうした指導により、学習者が聞き取った音声があるがままに再生できるならば、発音上の問題は生じないはずである。しかし実際には、目標言語の音声的基準も明確ではない学習者が、初めて耳にする音声を適切に再生することは、必ずしも容易とはいえない。更に、その再生に際し、学習者は母語の言語習慣を活用して、理解可能なように加工・変換している可能性もある。こうしたことが原因となって、目標言語の音声習得に対する負担が学習者に生じ、効率的な発話が阻害されている可能性もある。

そこで、本報告では、日本語の子音と母音によるCV音節を短く発話することが難しいとされる中国人日本語学習者を例に、日本語の連続する短いCV音節を中国語の軽声音節に置き換えた指導による日本語発話の基盤形成に関わるモデルを提示する。そして、異分野交流として、既に備わっている学習者の母語を目標言語の音声的基準として活用した指導を受けることにより、母語の発話習慣の目標言語への適用に気づくことが自己変容の促進のきっかけとなりうるか検討する。

パネル3（村上萌子）

「接触場面における共通理解の形成と参加者の言語的変容—日本語母語話者と非母語話者による話し合いを事例として—」

異なる言語的背景を持つ話者同士の会話では、母語話者同士の会話と比較して、話者間の共

通理解を妨げる言語的なトラブルが生じやすい。そのようなトラブルに、会話参加者は様々な手法を用いて対処する。時に、参加者は自らの発話を調整したり相手に調整を求めたりすることでトラブルを修復し、共通理解を形成する。あるいは、トラブルの修復を回避し、共通理解が形成されないまま会話を進行することもある。発表者はこれまで、日本語母語話者と非母語話者が参加する話し合いにおける参加者の共通理解の形成について、会話分析の手法を用いた分析を行ってきた。本発表では、共通理解の形成を妨げるトラブルに直面した参加者の行動について、これまでの分析を紹介する。そして、その結果をもとに、異なる言語的背景を持つ話者との話し合いを通じた参加者の「変容」について議論したい。

パネル4 (譚翠玲)

「タンデム学習におけるフィードバックと学習者の自己反省による変容」

タンデム学習におけるフィードバックの提供は、学習者の目標言語能力の向上に寄与する。しかし、学習者の教育背景や個人の好みによって、受け入れられるフィードバックの形式には違いがあるため、専門的なトレーニングを受けていない学習者が適切なフィードバックを提供することは容易ではない。本研究は、自己反省と行動変容に注目し、タンデム学習におけるフィードバック提供のプロセスを明らかにすることを目的とする。具体的には、タンデム学習を行う日本語または英語を学習する11名の学習者を対象に、フィードバック提供に関する7つの質問に自由記述形式で回答を得て、そのデータを「経験学習理論」(Kolb, 1984)を基に分析する。本研究の結果は、自己反省がフィードバック提供に及ぼす影響を明らかにし、それに基づく教育的示唆を提供するものである。

11月10日(日)学術交流会館 プログラムおよび発表要旨

プログラム

	部	時間	発表者	所属	題目
午前	連絡	10:00-10:10			
	研究発表 司会：酒井	10:10-10:40	村山友里枝	北海道大学	地方議会会議録における北海道方言ラサルの用例の分析(仮)
		10:40-11:10	佐野愛子 吉田美穂	立命館大学 弘前大学	継承日本語話者散在地域に住む家庭のファミリー・ランゲージ・ポリシー
	休憩	11:10-11:20			
	研究発表 司会：佐野	11:20-11:50	新海茜	北海道大学大学院生	ニセコエリアにおける英語学習の動機：高校生へのインタビュー分析から(仮)
		11:50-12:20	渡辺幸倫	相模女子大学	English for Specific Purposes における Target Situation Analysis の方法としての Video Stimulated Recall Interview
	閉会式	12:20-12:30			

発表要旨

11月10日(日) 午前

個人発表

10:10-10:40

氏名：村山友里枝 所属：北海道大学

題目：地方議会会議録における北海道方言ラサルの用例の分析(仮)

要旨：北海道方言の助動詞「ラサル」には、①非意図(自発)、②可能、③結果状態(逆使役)、④受身の4つの用法があることが知られている(山崎(1994), 円山(2007), 佐々木(2007)など)。二階堂・川瀬・高丸・田附・松田(2015)は、地方議会会議録を言語資料として用い、セミフォーマルというスピーチスタイルが見られるという指摘や、東北地方の「そうすれば」の用法の分析を通して、地方議会会議録が方言研究の資料として有用であることを論じている。本発表では、道内の地方議会会議録においてラサルがどのように用いられているのか、共起する副詞や、動作主、文脈との関係の観点から考察を行うことによって、これまでのラサルの用法の意味的特徴についての記述を見直すことを目的とする。

10:40-11:10

氏名：佐野愛子/吉田美穂 所属：立命館大学/弘前大学

題目：継承日本語話者散在地域に住む家庭のファミリー・ランゲージ・ポリシー

要旨：複数言語環境に育つ子どもたちのことばの力の発達においては、家庭内に限定された狭い言語使用にとどまらず、言語使用の幅を広げられるかが重要な鍵を握る。そのため、海外継承日本語教育では、日本人学校や補習授業校などの機関が大きな役割を担っている。しかし、継承日本語話者の散在地域においては、そうした既存の機関の活用が難しいところも少なくない。国境を超える人々の動機やあり方が多様化するにつれ、そうした散在地域で継承日本語教育を行う人口も増えていることが予想されるが、こうした場所における継承日本語教育の実態をとらえた研究は管見にして少ない。本発表では、カナダ、ドイツ、ハンガリーでのインタビュー調査データをもとに、これまで調査してきたカナダ・イギリス・香港の集住地区の状況と比較し、散在地域における継承語教育の在り方について、特に各家庭のファミリー・ランゲージ・ポリシーに焦点をあてつつ検討する。

11:20-11:50

氏名：新海茜 所属：北海道大学大学院生

題目：ニセコエリアにおける英語学習の動機：高校生へのインタビュー分析から(仮)

要旨：外国人の住民比率が高いことで知られる北海道有数のリゾート地域であるニセコエリアでは、日常生活の様々な局面で英語が使用される「英語化」の潮流が顕著である。筆者は、そのような環境下における高校生の英語学習の動機について、インタビュー調査を行った。得られたインタビューデータを SCAT 分析し、Dörnyei and Ottó が考案したプロセスモデルを理論的枠組みとして援用した。分析結果から、高校生の英語学習は主に行動前の局面の段階において高められていることが明らかとなった。その背景には、ニセコエリアでは高校生がアルバイトや学校内での交流活動を通じて実際に英語を使う機会が多いことが影響していた。

11:50-12:20

氏名：渡辺幸倫 所属：相模女子大学

題目：English for Specific Purposes における Target Situation Analysis の方法としての Video Stimulated Recall Interview

要旨：本研究は、観光 ESP の目標状況分析 (TSA) の方法として、ビデオを活用した振り返りインタビュー (Video Stimulated Recall Interview : VSRI) を利用することの利点と注意点について論じる。

VSRI は、参加者の記憶のみに依存した「こうだった (かも)」ではなく、より実際のコミュニケーション接近できる手法である。TSA では、関係者へのインタビューや質問紙調査が一般的であり、これらの方法は回答者の主観の影響を避けられない。また、実際の対話を反映しているかは確認できず、意図していないコミュニケーションの特徴を見落とす可能性もある。これに対して、VSRI は、非言語コミュニケーションや複雑な対話状況を細かく捉えることができ、参加者が自身の行動や対話をより正確に振り返る機会を提供する。しかし、ビデオ撮影には行動への影響や倫理的配慮が必要である。撮影中であることを周囲に知らせることや、映像や情報を匿名化することの他に、研究成果の発表時にも様々な配慮が必要である。

以上を比較衡量した結果、配慮すべき点はあるが VSRI は観光におけるコミュニケーションの複雑な実態を理解し、観光 ESP に必要なニーズを考察する上で有益であると考えられる。